

ルーサー・H.エヴァンズと手稿本の帰国

笠井勝子

ルーサー・H.エヴァンズは1945年からアメリカ議会図書館の第10代館長を務めた。館長になった翌年、1946年3月に彼は二度目の麻疹を患った。米国議会図書館長が麻疹に罹るということは「服従違反とは言わないまでも、あまり褒められた話ではない」、エヴァンズは彼らしいユーモラスな調子で述懐をしている。13才で最初の麻疹をやったときには、『アイヴァンホー』を抱えてベッドに寝ていた。31年後に44才で再び麻疹に罹った図書館長の枕元には、毎日緊急の決済を要する書類とニューヨーク・タイムズが届けられた。こうして、エヴァンズが後に書いているとおり、「すべては、麻疹に始まった」のである。

1946年3月14日木曜日に病床のエヴァンズが開いたニューヨーク・タイムズの27頁には次の記事が出ていた。

From Original 'Alice in Wonderland' Copyとして、ルイス・キャロル自身が描いた、茸の上で水煙管をふかす芋虫と傍に立って両手で茸を千切ろうとするアリスの挿絵が掲載され、その下には、Alice and the hookah - smoking caterpillar, an illustration by Lewis Carroll in the manuscript which is to be sold at auction on April 3 at the Parke-Bernet Galleries here.

記事の内容は、ちょうど18年前にオークションにかかったルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』のもとになった手稿本が、4月3日にニューヨークのパーク・バーネット・ギャラリーで2度目の競売にかかる、というものであった。奇しくも競売の第一回目の日付は二回目と同

じ4月3日(1928年)のことで、ロンドンのサザビーで行なわれていた。この時の競りは5千ポンドから始まり、12,500ポンドのところで大英博物館が断念した。その後、ローゼンバックとウェルズズの代理人で競り合い、前者が15,400ポンド(約75,259ドル)で競り落とした。ひとりの作家の手稿本の額としては前代未聞の最高額であった。

12才のアリス・リデルは1864年のクリスマスに靴下の中に手稿本を見つけた、という。それは、従来ハドスンなどがドジスンの日記に従って1864年の11月26日にアリス・リデルの手に渡っていた、としているのは異なる。¹⁾ドジソンはアリス・リデルへ送った、とは書いているが、翌日アリスに出会った時に、手稿本の話が何も出ていないことを人々は不思議に思っていた。このアリスの回想、「クリスマスの靴下の中から贈り物を見つけた」によって、アリスが受け取った時はそれより1か月後のクリスマスであったことがわかる。

手稿本の初めには、“A Christmas gift to a dear child, in memory of a summer day”と飾り文字で手書きされていた。それから65年間をこの小さな本は、アリスの傍で過ごした。その間、1880年に28才でアリスはレジナルド・ハーグリーブズと結婚し、3人の男の子をもうけた。その内2人まで、戦争で失い、社会的でスポーツマンの夫に先立たれたアリスは、英国南部にあるリンドハーストの屋敷で自らの生活が支え切れなくなって手稿本を競売にかける。1898年に65才で世を去ったドジソンはその手稿本が65年間アリスの手元にとどまった後、最後には自分の力で彼女を経済的な苦境から救い出した、と言える。こうして、アリスの元を離れた、キャロルの手書きの本は大西洋をアメリカへ渡った。

その2か月後、1928年6月になって、エルドリッジ・ジョンソンはローゼンバックから手稿本を買い取った。きわめて珍しい1865年版の回収された『不思議の国のアリス』の本2冊と合わせて、ジョンソンが支払った額は15万ドルを超えたと推定されている。そのうち1865年版の2冊

は、キャロルとテニエルが改訂用に共同で使用したan association copyで、テニエルのオリジナルの挿絵が10点描き込んであり、キャロルの手になる印しや語句の書き込みがある一冊で、あとの一冊は、『紳士、ハリファックス』の著者であるG.リリー・クレイク夫人のために、ドジスンが署名入りで贈呈した本であった。

話を麻疹で寝ている議会図書館長に戻そう。彼が読んだニューヨーク・タイムズの記事は、こう書いている、「クリスマスの靴下の中にアリスが見つけた本の中の物語は、1862年、アメリカの独立宣言の記念日に、オクスフォードの数学の先生がアリスと彼女の姉と妹をピクニックに連れて行き、話して聞かせたものである」。新聞には、ただ1928年4月3日にロンドンのサザビーでのオークションで、大英博物館が国民のためにこの手稿本を手に入れようと頑張ってみたが、12,500ポンドが限界で、下りてしまった。それだけではなく、A.S.W. ローゼンバック博士は手稿本とドジスンの6通の手紙を15,400ポンドで手に入れた。」と報じていた。

この記事の特に終りの部分について、エヴァンズは次のように思いを巡らしていた。

“In the leisure of my enforced idleness I began to think about the aggressions which unusual riches had enabled Americans to commit earlier in the century against the cultural patrimony of other countries.” 彼は、莫大な富を持つアメリカ人が他国の文化遺産を次々に買い取ることを憂慮した。エヴァンズはユネスコのアメリカ代表として、前年の暮れには、ロンドンでユネスコ憲章の起草に関わっている。そこに唱われているものは、世界に平和を齎すための気高い精神である。理想に燃える行動家のエヴァンズは、ユネスコの目的に共感し、その将来に対して大きな期待を抱いていた。病床で、ニューヨーク・タ

イムズを読んだエヴァンズが思い起こしていたのは、ユネスコ憲章にうたわれるはずの次の二つの理念であった。

“One ... was a respect for the cultural heritage of all countries, and another was the jealous preservation of and making widely available the world's books, manuscripts, art objects, and other materials of learning and research.” すなわち、すべての国の文化遺産を尊重すること、そして世界的に意義ある書物、手稿本、美術品、学術的文物の保存と普及を行なうこと、である。

ロンドンを訪れたときに、目にしていた戦後の英国国民の窮状も彼の心に蘇ってきた。エヴァンズの心にはある思いがつきあげてきた。彼はアメリカの行き過ぎた買い占めを償い、また英国の犠牲の陰でアメリカが得た恩恵に対する謝意を表わすために、行動を起こそうと決意した。

行動の人は、またユーモラスな表現が巧みな人でもある。彼は書いている。“Being an administrator, that is, an underpaid semi-intellectual whose job it is to put other people's ideas into noiseless practice, with care to obscure the fact if perchance an idea is his own.” 「行政マンなるものは、安月給の準頭脳労働者であり、他人のアイデアを黙って実行に移すのが役目。万一それが自分のアイディアであり、提案であってもそんなことはおくびにも出さない人間なのである」。

確かにそのとおりであった。ドジスの手稿本が大英博物館へ戻ったことはよく知られているが、エヴァンズの名前とその人、その役割については、これまでほとんどといってよいほど語られていなかった。

エヴァンズの決断はこうだった。極く気前よく財布をはたく賛同者を説き伏せて、この悩みから自分を救い出させること。きたる4月3日にニューヨークのパーク・バーネット・ギャラリーで行なわれる競売で、手稿本を手に入れること。これ以上にふさわしい贈り物はないといえる

この本を、英国への文化遺産の返還として贈ること。大英博物館が手稿本へ寄せる思いは、この18年の間、決して衰えてはいないはずだ、そうエヴァンズは考えた。彼は病状が回復するのを待って即座に行動を起こした。そして、計画どおり、彼の名前はマスコミには知られていない。彼にきっかけを与えたニューヨーク・タイムズも、競売までの動きは一切察知していなかった。1946年4月4日（競売の翌日）付けのニューヨーク・タイムズの22頁には、

“...the absence of British bidding was considered to be in part responsible for the lower price...”と報じている。英国からは競売への参加が無かった、ということがこの記事でわかるし、また、エヴァンズの善意を知った人々が競り値を差し控えたことも、理解できる。事実、手稿本の競りはわずか2分で終了した、“Bidding Over in Two Minutes”と小見出しがついている。この成り行きをニューヨーク・タイムズは、1920年代終りの好景気の中で行なわれた前回の競りと、40年代半ばにおける今回の競売とでは買い手の資金力が比較にならないほど落ち込んでいる、と分析している。

しかし、少し先を急ぎすぎた。エヴァンズはどうやって計画を実行に移したか、それをみていこう。

“As soon as it was safe to go downstairs to the telephone without danger of a relapse, I called Lessing Rosenwald, who had recently contributed a magnificent collection to the Library of Congress, and asked his advice.”

病状がぶり返す恐れがなくなると、まず、レシング・ローゼンウォルドに相談をした。レシング・ジュリアス・ローゼンウォルドは1891年にシカゴで生まれ、父親は通信販売店から始まったアメリカの百貨店シアーズ・ローバックの大株主となり、やがて会長になる。レシングは父の方

針で、シアーズの出荷部門を振り出しに一切の優遇を受けないことを条件にして会社の各部門を経験し実力で39才のときに副社長に指名されている。それから10年後、48才で引退して余生は社会事業と古書、絵画の収集に費やした。1943年に収集した古書を政府に寄贈したのに続いて、ナショナル・ギャラリーにはおよそ6500点の絵画を、議会図書館にも貴重な書籍、レファレンス資料を寄贈した。その縁で、エヴァンズはローゼンウォルドを思い出したのであった。レシング・ローゼンウォルドの収集の哲学は、書籍、絵画を愛するために買うのであって、投資のためではない、というものであった。ついであるが、この人を語るとき次のような彼の信念も興味深い。ローゼンウォルドはシアーズを引退後、1943年にアメリカのユダヤ主義協議会の会長になった。彼は、パレスチナにユダヤ国家を建設することには反対の立場であった。そのような国家建設はユダヤ人問題の解決にならないし、むしろそれどころか世界中のユダヤ人を苦境に追いやり、また中東の緊張を高める、と考えた。彼はそれよりも、米国その他の国々がユダヤ人の移住を拡大し、それによってユダヤの知識人を世界に広めることが、世界の平和と向上に役立つと考えていた。

エヴァンズから相談を受けたローゼンウォルドは、手稿本返還の提案を非常に喜んだ。エヴァンズは次のように書いている。

“He accepted my idea with genuine enthusiasm, and volunteered to put in some large blue chips and to assist me in wheedling others into supporting the project.”

高貴な目的に、高貴な心の人には感動し援助を差しだし、積極的に友人たちに呼びかける。彼の助言によって、エヴァンズはローゼンバックに話を持っていき、彼を仲間に入れて手稿本の競りをしてもらうことにする。つまり、ローゼンウォルドの直感は、最初の競りで手稿本を獲得したローゼンバックが、二度目の競り、しかもこれで二度と起きない最

後の競りで、この無類の本を再び自分の手で競り落とすことになれば、喜ぶにちがいない、というのであった。助言どうり直ぐに電話をしたエヴァンズは、受話器の向こうのローゼンバックを次のように描写している。

“Dr. Rosenbach was as excited as a young girl on her first date. He offered spontaneously to do the bidding without a commission.” この夢のある提案に対して、1876年生まれで当時70才のローゼンバックは、まるで最初のデートの日の小娘ようにはしゃいでいた、という。そして彼は自分から手数料なしで競りをやることを申し出たのである。

エイブラハム・サイモン・ウルフ・ローゼンバックはフィラデルフィアで生まれた。父はドイツからの移民、母は生粋のフィラデルフィア人でイザベラ・ポロック・ローゼンバックといった。父の事業が失敗した後、兄のフィリップ・ハイマンがギフト・ショップを興し、やがてアンティークを扱う事業に発展して成功。勉強好きで怠け者の弟、世間ではA.S.W.とか、ドクターR. あるいは唯、ドクターと呼ばれるようになる弟にRare and Antique Booksの部門を担当させて、仕事に就かせた。これが、『アリス』の手稿本の最初の競売に登場したローゼンバックである。彼の仕事ぶり、扱う古書、稀観本の桁外れの内容と価格でローゼンバック・カンパニーは一躍、名声と富を築いたのである。成功の影には、彼の人柄があった。A.S.W.は顧客をたちまち友だちにしてしまう。何より彼の中には稀観本や手稿本の持つ不滅の価値に対する信念があった。彼の情熱は顧客を虜にし、途方もない「ローゼンバック価格」というもので取り引きをさせてしまう。こうして、A.S.W.が手がけた稀観本の部門はローゼンバック・カンパニーに名声と富を齎したのであった。現在Folger Shakespeare Libraryとして知られているシェイクスピアの比類ないコレクションは元はHenry C. Folgerが収集したもので、その影

にはローゼンバックの力があつた。また、A.S.W.の親しい友人で顧客また経済的な後楯となつていたWilliam M. Elkinsは、収集した本をフィラデルフィアのFree Libraryに寄贈したし、Edward S. Harkness夫妻がA.S.W.から購入した書物はイエール大学、ニューヨーク・パブリック・ライブラリ、それに議会図書館が寄贈を受け、恩恵をこうむつてゐる。A.S.W.が晩年に手伝つた最後の大きな収集と言えるもの、それがレシング J. ローゼンウォルドのコレクションで、これがエヴァンズが館長を務める議会図書館へ寄贈されてきた。

公共に裨益するために捧げられたこれらの膨大な収集とは別に、A.S.W.の傍には彼の書物の知識とウィスキーで熱が入つた弁舌を楽しむために多くの人々が集まつてきた。Beverly Chew, John L. Clawson, Herschel V. Jones, A. Edward Newtonらが最初の頃の顧客であり、友人であつた。後には、William A. Clark, Frank B. Bemis, John W. ScheideそれにOwen Youngらに加わり、A.S.W.の周囲には常に、その人の知識と情熱に魅了された人々がいた。晩年になつて彼の友人には、Frank J. Hogan, Edward L. Doheny夫人、Arthur A. Houghton, Jr., それにDonald Hydeがいる。これらの人々の中には、ルイス・キャロル文献資料の所蔵先を検索する途中で、出合う名前もいくつかある。

ローゼンバックがアメリカのみならず、海外にもその名を知られるようになったのは、世界的な書物や手稿本を記録的な価格で買い取り、それをマスコミが華々しく報道した頃に始まつた。シェイクスピアのファースト・フォリオを彼ほど幾度も扱つたディーラーはいない。初めは1907年のヴァン・アントワープ本、そして1922年にBurnett-Couttsで手に入れたもの、さらに1933年にローズベリで手に入れた本には14,500ポンドを払つてゐる。グーテンベルグ聖書については1911年にロバート・ホー・コレクションの競売で27,500ドルを払つた。2冊目のグーテンベルグ聖書は個人的に手に入れたJames W. Ellsworthのコレクションの中に入つ

ていた。1923年にロンドンで手に入れたキャリズフォート本には8500ポンドを出した。そして、1926年に4冊目の彼が最後に手に入れたMelk Abbeyからのグーテンベルク聖書には、106,000ドルの値をつけてセンセーションを巻き起こした。A.S.W.ローゼンバックは稀観本の世界において、まさに華麗な存在であった。したがって、1928年に『地下の国のアリス』の手稿本がロンドンのサザビーで初めてオークションに掛けられ、アメリカからローゼンバックがまさに乗り込んできたとき、彼の止まるところを知らない競り上げが脅威であったことは、想像に難くない。新聞は、“one of the most sensational sessions in the auction history”と書いている。そして大英博物館は、上述のように12,500ポンドで下りざるをえなかった。14,500ポンドという額は、“believed to be the highest price ever paid for an author’s manuscript”と書かれた。即ちエヴァンズが、アメリカ人が財力にものを言わせて他国の文化遺産を手に入れることを憂慮するとは、このことをさしている(“I began to think about the aggressions which unusual riches had enabled Americans to commit earlier in the century against the cultural patrimony of other countries.”)。

ただ、勿論、A.S.W.は私利私欲に駆られていたわけでもない。彼に「そそのかされて」稀観本を集めた財閥たちは、既に見てきたように、その生涯の終りには、コレクションを国や大学の研究機関、図書館に寄贈し、文化遺産の保存に貢献をしてきた。A.S.W.の熱っぽい働きかけがなければ、貴重な古書も手稿本も散逸し、所在不明となっていたことであろう。稀観本の価値に対する認識を高めた功績は大きい。

話を元に戻すと、エヴァンズからの手稿本を大英博物館へ寄贈するために、4月3日にパーク・バーネットで行なわれる二度目の競売に参加してほしい、という依頼に、ローゼンバックは歓喜した。そのnoble ideaに感動し、彼は即座に手数料は取らないこと、自分と兄も買い戻したのた

めに寄付すること、そして、支払いが寄付金が集まるまで自ら立て替えて待つことを申し出た。

エヴァンズとの電話では、さらに競りの上限が話し合われた。A. S. W. との話し合いの結果、エヴァンズは10万ドルまでの範囲で、ローゼンバックに競りを一任し、それをエヴァンズ自身の口座に請求するように、そして、このことに関して、議会図書館には一切の責任はないことを強調した。ローゼンバックは7万5千ドルで大丈夫と考えはしたものの、万一の場合に備えて10万ドルの上限額を提案したのだった。

以上が手稿本の競売に至るまでの舞台裏である。電話の時期がいつであったか、エヴァンズの記録にはないが、彼はその後3月22日付で Wilmarth S. Lewis にこの計画を電報で知らせている。

競売の結果について1946年4月4日のニューヨーク・タイムズは、不思議の国のアリスをなぞらえて、次のように報じている。

“Alice must have had some of the contents of the bottle marked ‘Drink Me’ yesterday, for while she didn’t quite shut up like a telescope, she was considerably reduced.” 「アリスは、『私を飲んで』と書いてある瓶の中身を飲んだのにちがいない。望遠鏡のように畳んで小さくなった、とまではいかないが、ずいぶんと収縮してしまったのだ。」

もう一つ、ニューヨーク・ワールド・テレグラム紙が、オークションの様態を詳細に伝えている。

“Lot No 51.” said the auctioneer, “the greatest item of Juvenile literature in the world.” He paused, then asked, May I start it at \$50,000 ?”

There was no answer. The 250 persons waited in the small sales-room of the Parke-Bernet Galleries, 30 E 57th St. This

was what most of them had come to witness --- the sale of the original manuscript of the book that came to be called "Alice in Wonderland".

Originally written for little Alice Liddell in 1863. It had been treasured by her until 1928, when, needing money, she had sold it at Sotheby's in London for \$75,259. The buyer at that time was the American book antiquarian Dr. A.S.W. Rosenbach.

Auctioneer Anthony N. Bade hesitated, then said, "I have a starting bid of \$25,000." Within half a minute the bids rose to \$30,000, \$35,000, \$40,000, then \$50,000 --- where they stopped

"Sold" said Mr. Bade, "to Dr. Rosenbach for \$50,000."

Outside the salesroom Dr. Rosenbach was being congratulated by dealers and spectators "Yes," he said, "it is just 18 years to the day that I bought it. I'm glad to have it again."

Only one other person has owned the slight 90-page MS. since the doctor bought it in 1928. This was the late Eldridge R. Johnson, one time head of the Victor Talking Machine Co. It was his collection that was being sold.

One other person was being congratulated in the outer room. This was David Kirschenbaum, owner of the Carnegie Book Shop on E 59th St. He it was who started the bidding at \$35,000. He also won a pool among 35 booksellers for guessing the price "Alice" would bring.

Other dealers got parts of the 101 lots of books, prints, sketches, letters and photographs relating to the wonderful

Alice. An unknown name in book collecting circles, Francis A. Ketlanch, bid the next highest price for an item. This was \$23,000 for the corrected proof sheets of the very first edition of "Alice". Later he paid \$7,500 for one of the 15 known copies of the rare 1865 first edition.

Altogether the 101 items brought \$7,100,750. Far more, in fact, than the Rev. C.L.Dodgson, who came to be known as Lewis Carroll could ever have guessed.

他では伝えられていない事実は、競りを担当したA.N.ベイドがおそらく噂で伝えられた予想価格10万ドルを見込んで、いきなり5万ドルから開始したところ、声が掛からないために値を下げて出直しをしたということや、カーネギー書店のカーシェンボームが35人の書店主たちと、アリスの競り値の予想を立てて、その掛けに勝ったこと。フランシスA.ケトランチという収集家が初版用の校正紙に23,000ドルを出した、ということ。さらに、この頃1865年の初版『不思議の国のアリス』は15冊の所在が分かっていた、ということである。

この日のカタログは *The Eldridge R. Johnson Collection Part 1 Manuscripts Books And Drawings* という122頁の冊子になっていた。その中の39番から95番までがルイス・キャロル関係である。第42番は、1885年3月7日付けのアリス・ハーグリーブズに宛たドジスの手紙で、『地下の国のアリス』のファクシミリ版出版のために、手稿本を一時借り受けることができた礼状である。この他のドジスの手紙としては、手稿本のファクシミリ出版に関するアリス宛の手紙が、同年3月21日付け(43番)、7月15日付け(45番)、8月14日付け(44番)9月23日付け(46番)、11月6日付け(47番)で合計6通出ていた。このうち、初めの5通は、Morton Cohenが編集した *Letters of Lewis Carroll* の第1巻に入ってい

る。しかし11月6日付けの手紙は、入っていない。おそらく、他の5通と共に、Berol Collectionに入っていると思われる。

ジョンソンが手稿本を取得した事情について、ローゼンバックは、要望があれば人々に公開することを目的とする、と語っている。事実、フィラデルフィアのFree Libraryを皮きりに手稿本は、New York Public Libraryやコロンビア大学などで展示公開された。それ以外のときは、ジョンソンの傍にあって、150万ドルのヨットで出かける船旅にも持って行っている。手稿本には、耐火性で水に沈まない特製の箱を誂え、ヨットの中にはクイーン・アン風にデザインさせた机を持ち込んで、その上に置いていた。

アリス・リデル以外で、手稿本を私有できた唯一の人、エルドリッジ・リーヴズ・ジョンソンは、1867年生まれの発明家であった。Emile Berlinerが1887年に発明した蓄音機を、ジョンソンは“a partially educated parrot with a sore throat”「生かじりの教養をひけらかす喉荒れを起こしたおうむ」と、悪口を言ったりもしたが、その発明は大いに好奇心を刺激され、自ら改良に取り組んだ。こうして1901年には、Victor Talking Machine Companyを設立しその会長になる。拡声器の前に座って「主人の声」に耳を澄ます犬の商標と一緒に、ヴィクターは世界中の家々に音楽を齎すという画期的な役割を果たした。巨万の財を築いたジョンソンは、発明以外にも考古学やヨット、釣を趣味とし、また優れた絵画や書籍そして手稿本の収集に力を入れた。1945年11月14日、78才でジョンソンが他界すると、未亡人はその貴重なコレクションを競売に付した。

競売の翌日、4月4日付けのThe Philadelphia Inquirer紙によれば、この競売に参加したのは、ローゼンバックの他に、スクリブナー書店と、フィラデルフィアのチャールズ・セスラーだけであった。

競りは明らかに手控えて予想の半分で落された。しかし、その5万ドルの寄付の調達は決して楽なことではなかった。エヴァンズと彼が最初に相談をしたローゼンウォルド、それにローゼンバックの三人は友人、知人に寄付の依頼をしてまわる。初めの年こそ、かなりの成果が上がったものの、まだ目標の5万ドルには到達していない。エヴァンズの方も、図書館長の仕事、ユネスコ会議の仕事に追われていった。

1948年の夏の時点で手稿本の代価は8000ドルが未払いであった。しかし、ローゼンバックの仕事を手伝っているジョン・フレミングから、手稿本を大英博物館へ届けてはどうか、と言ってきた。ちょうどこの年11月にエヴァンズはバイルートで開催されるユネスコの総会に出席するためにロンドン経由で出かけることになっていた。

エヴァンズは手稿本との旅を次のように書いている。

One fine day right after Thomas E. Dewey conceded his unexpected defeat by Harry S. Truman, I took the precious item from the safe in the Librarian's office and tucked it in my briefcase. The manuscript spent a peaceful night in the room where my 12-year old son slept.

それはトルーマンが大統領選に勝利した直後であった。エヴァンズは議会図書館館長室の金庫から手稿本を取り出し、その夜は12才の息子ジル・エヴァンズが寝ている部屋に置いてやった。

翌日、予定していないことが起きた。

そのことを、ニューヨーク・タイムズのケネス・キャンベルは次のように詳しく伝えている。

'Alice' Script Has Surprise Exhibitの見出しで、次のような小見出しが続き、

Delay of Liner Inspires its Custodian to Impromptu Showing at Library.

記事は先ず、時計を気にする白兎から始まっている。

..... the rabbit actually took a watch out of its waistcoat-pocket, and looked at it, and then hurried on” -----

Alice in Wonderland.

Yesterday morning Dr. Luther H. Evans, librarian of Congress, took HIS watch out of HIS waistcoat pocket and then hurried on to the New York Public Library when he discovered that chance had given him time to put the original manuscript of “Alice in Wonderland” on display for just one day.

Dr. Evans was scheduled to board the liner Queen Elizabeth yesterday on his way to turn the manuscript over to the British Museum where it will stay. The liner was late.

It occurred to Dr. Evans that since the manuscript would be here for one day more, he might as well let New Yorkers have one last look at it.

So Dr. Evans telephoned to his friend, Ralph A. Beals, director of the library, who told him to bring the manuscript right over.

They put it in a case under guard just inside the Fifth Avenue entrance of the main branch building at Fifth Avenue and Forty-second street.

Not only did the liner’s delay give a rare chance to those persons who happened into the library yesterday but it also provided Dr. Evans with a safe place to keep it for the day. The “Alice manuscript was last sold for \$50,000 and isn’t the kind of

a thing that you stuff into your coat pocket along with your cigarettes.

It is a manuscript known to book lovers the world over. It is in the handwriting of Charles Lutwidge Dodgson, who came to be known as Lewis Carroll and, as the dedication sets forth, it was "A Christmas gift for a dear child in memory of a summer day."

The summer day was July 4, 1862, when Dodgson, a mathematics professor who stammered a little, took Lorina, Alice and Edith Liddell, the three small and lovely daughters of a friend, on a river picnic. He made up a story for them about a little girl named Alice who fell into a great hall. Two years later he wrote the story and illustrated it, and it was in Alice Liddell's stocking on Christmas morning.

Alice became Mrs. Reginald Hargreaves, and just before her death a few years ago she sold the manuscript. It ended up in the United States, but the fact that we could have it in this country simply because we had more money to spend for it than the British bothered not a few people, among them, Dr. Evans.

"So now the "Alice" manuscript is going back to the British as a sort of 'cultural reparation,'" Dr. Evans explained. He said he had raised by private subscription the \$50,000 necessary to buy the book and that it was going to the British Museum, which had been out-bid by American money when the manuscript first came up for sale.

"It is a gift from certain persons in the United States to the

British people as the slightest sort of token of recognition for the fact that they held off Hitler while we got ready for war," Dr. Evans said. He will stop off in London for the ceremonial delivery of the "Alice" manuscript on his way to Beirut, Lebanon, for a meeting of the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization.

Photographers taking pictures of Dr. Evans, Mr. Beals and the manuscript in the Public Library foyer yesterday attracted a crowd. Dr. Evans told everybody about the manuscript and why it was going back to England. A woman said she would like to contribute to the project. Dr. Evans told her that most of the persons who had contributed toward the purchase of the book had given \$1000.

"I'll give you five dollars if that will help any," the woman said. Dr. Evans took her money on the spot and gave her a receipt. "If there is anything left over, after the subscription is raised for the manuscript, we will use it to buy other books for the British Museum; will that be all right with you?" Dr. Evans asked. The donor said it would.

Men, women and children pressed around the case in which the beautiful little bound manuscript lay. There is a bond among "Alice" lovers. Strangers were soon asking each other if they remembered the part of where _____ and so forth.

One young man about five had never heard of "Alice in Wonderland" and after looking at the manuscript demanded that his mother proceed forthwith to the children's lending section and take out a copy. He set up piercing yells when his mother

discovered that she did not have her library card with her.

The manuscript was last on public display in New York City in 1932 at a Columbia University exhibit of items connected with “Alice in Wonderland.”

(The New York Times p.61 Sunday, November 7, 1948.)

11月5日に予定していたクィーン・エリザベス号の出航が遅れたために、エヴァンズは友人でニューヨーク・パブリック・ライブラリの館長であるラルフ・A・ビールズに電話をした。手稿本がアメリカを離れる前に公開しよう、という提案であった。ビールズは即座に受諾し、展示用のケースと警備員を用意した。二人の善意と即断で、その日たまたまパブリック・ライブラリを訪れた入館者は、大人も子供もケースの中の小さな手稿本の物語とイギリスへ戻ることになっている経緯について、エヴァンズから直接話を聞いた。特に、先の大戦でドイツのヒトラーに対して単独で抗戦したイギリス国民に対し、参戦するかどうかの議論に時間を費やしていたアメリカとして、謝意を表わしたいがためであるという彼の説明を聞いたひとりの女性は、その目的のために5ドルを寄付したい、と申し出た。エヴァンズはその場で領収書を書いて受け取った。彼は、もしも集まった寄付に余剰が生じた場合には、キャロルの他の稀観本をも買い取ってイギリスへ帰りたい、という趣旨に了承を求めた。^{#1)} ケースを覗いた5才の男の子は、児童書の部門から『不思議の国のアリス』を借り出してくれと母親にせがんでいる。

エヴァンズを動かしたのは文化遺産の書物に対する深い敬意と愛情である。彼の人間性は、議会図書館長、ユニセフの米国代表、という肩書き同様、大きくひろやかなものであった。臨機応変に対応のできるエヴァンズと友人ビールズによって手稿本は米国での最後の一日さえも、ニ

ニューヨークの人々を喜ばせることができた。エヴァンズもまた、図書館の警備員付きの展示ケースという安全な保管場所を確保できた。エヴァンズは、そのことをごく手短かに書いている。

The next day it was on exhibit for some hours in the New York Public Library, and was there also for the night, prior to the sailing of the *Queen Elizabeth* on November 6, 1948.

ニューヨーク・パブリック・ライブラリで予定にない展示ができた後、『地下の国のアリス』の手稿本は、1948年11月6日、クィーン・エリザベス号で祖国、英国へ向かった。

航海の間、エヴァンズは船上で開かれたユネスコ代表者の打ち合わせの合い間を縫って、手稿本を開いて読んだ。船内の主たる保管先は、図書室の展示ケースとパーサーの金庫であった。そのパーサーは、ちょうど1932年にアリス・プレザンス・ハーグリーヴズが、キャロル生誕百年祭にあたってコロンビア大学から名誉文学博士号を受けるためにアメリカへ渡った時に同じように乗船していたのである。彼はその思い出を誇らしくエヴァンズに語った。

船はサウサンプトンの港に着いた。税関には既に話が通っていた。ロンドンに到着したのは、金曜日の真夜中であった。エヴァンズはすんでのところ、列車の座席に手稿本を置き去りにするところであった。一行のスケジュールは翌日、土曜日の午後5時にグマスカス行きの飛行機に乗り継ぐことになっていた。時間の余裕はない中で、時の大英博物館の館長、ジョン・フォースダイク卿⁽²⁾は、所轄の館員たちと準備を整えて待っていた。予め打ち合わせの電報がこの二日前に船上のエヴァンズに宛て届いていた。

冷たい雨の土曜日であった。午前10時にエヴァンズは大切な宝物を手
に、車で大英博物館へ向かった。夜明けまでの短い間、手稿本はホテル
の彼の枕の下で時間がくるのを待っていた。

贈呈式には、博物館の理事長を務めるカンタベリ大司教が出席した。
大司教と英米二人の館長の手が小さな手稿本を支え、三人は微笑みのま
なざしを一冊の本に注いでいる姿が、11月15日月曜日のタイムズ紙で報
道されている。そのまったく同じ紙面には、前日の夜、エリザベス王女
(当時)に男子(チャールズ現皇太子)が誕生した喜びの市民の表情を上
段に載せていた。英国民にとって相前後して起きた二つの大きな喜びが、
同時に紙面を飾っていたのである。

贈呈の席上で、エヴァンズがおこなったスピーチは次のようなもので
あった。

“...the gift was made by a group of citizens of the United
States who wanted to perform an act of justice (cultural repara-
tion) and also an act of thanks for the valiant defense of West-
ern civilization and the liberties of all men against German
might and terror, a defense organized by the British while
Americans were engaged in arguments over whether interna-
tional affairs were of any concern to them.”

これを受けて、カンタベリー寺院のジェフリー・フィッシャー大司教^{註3)}
は感謝のスピーチをおこなった。

“... an unsullied and innocent act in a distracted and sin-
ful world ... a pure act of generosity.”

同行したユネスコのアメリカ代表団など、その場に居合わせたアメリカ

人は少なからず鼻を高くしたようだし、一方、イギリス人の方は喜びの興奮と感動に胸を熱くしていた。まことに『アリス』は帰ってきたのだ。

11月14日付けのニューヨーク・タイムズはロンドンの特派員報告として、次のように報じている。

Carroll Work Returned/Original Manuscript of 'Alice'/Presented to British Museum/Special to The New York Times

London, Nov. 13 ---- Lewis Carroll's original manuscript of "Alice in Wonderland," which has been for the last twenty years in the United States, was formally presented to the British Museum here today by Dr. Luther H. Evans, Chief Librarian of the Library of Congress. The 86-year-old work was accepted by Dr. Geoffrey Fisher, Archbishop of Canterbury, as principal trustee of the museum.

The manuscript originally was bought at a London auction in 1928 by a New York book dealer. In 1946 it was auctioned in the United States, and was bought for \$50,000 by Dr. Evans, representing a group of thirty anonymous donors of the presentation.

According to museum officials, week-end visitors to the museum already have begun flocking to the Manuscript Room, where the immortal work is on exhibit.

(New York Times, p.6 Nov. 14, 1948)

博物館を、この週末に訪れた人々は、早速、この不朽の作品の手稿本を目にすることができた。

未払いの8000ドルの返済ができたのは、それから5年近い1953年のほ

じめであった。大英博物館に対しては、公開しないという前提で寄贈者名簿が渡された。計画の当初から寄付は匿名でおこなう、という申し合わせになっていた。

ルーサー・ハリス・エヴァンズ、1902年10月13日、テキサス州のバストロップ郡生れ。教員が一人だけの田舎の学校に10年間通った。テキサス大学で21才の時B.A.を、22才で政治学のM.A.を取得した。一と夏をヨーロッパで過ごし、フランス、イギリス、スイスの政治体制について研究し、帰国して、リーランド・スタンフォード大学で政治学を講義する。1927年に政治学の博士号を取る。論文は委任統治体制と委任統治領の行政をテーマに、国際間の問題を扱った。

1928年から35年にかけて、エヴァンズはニューヨーク大学、ダートマスカレッジ、それにプリンストン大学で教えた。1935年に歴史的記録文書調査を全米に繰り広げる。1939年、議会図書館館長のアーチボルド・マクリーシュがルーサー・エヴァンズをLegislative Reference Service (現在のCongressional Research Service) の部長に選任した。この時からエヴァンズと議会図書館との関わりが始まる。翌年には、副館長となる。そして1945年4月12日にフランクリン・ルーズベルトの死でその後を継いだトルーマン大統領によって議会図書館館長に指名され、6月29日、上院の承認を受け、翌日、宣誓式をして、1953年までその職にあった。アメリカの議会図書館長は、文化相に相当し、大統領が指名し、議会が承認をする。彼の館長就任を祝って、ワシントン・イーヴニング・スター紙の政治漫画家でピュリッツァー賞を受賞したクリフォード・K.ベリマンは、館長の椅子に座って山のような書類を前に笑顔のエヴァンズの似顔絵を描き、ぬいぐるみの熊が彼の肩に手をかけてこう話かけている絵を載せた。Teddy bear says: "Dr. Evans, Cliff has been searching the dictionary for words to adequately express his

feelings over the appointment of the new head of the Library of Congress. “Dee-lighted,” Teddy’s own word of years ago fits like a glove.” クリフはクリフォード自身のこと。テディベアを彼は漫画によく使っている、それはまたシオドア・ルーズベルトの愛称でもあった。「お祝いに何とさえ一番ふさわしいか」といって、探し出したことば、Dee-lightedと書いたのは、シオドア(テディ)・ルーズベルトの発音の癖を表わしたもの。昔々テディがよく口にしていたことばをもって、クリフォードは館長就任を祝福した。

エヴァンズは、1953年からはユネスコの総裁を58年までの5年間務めた。1962年にはDirector of International and Legal Collections for the library of Columbia Universityまたそれに引き続きChairman of the Association for the World Universityを務めている。

ルーサー・エヴァンズは、1981年12月23日にテキサスのサンアントニオの自宅で、亡くなった。

没後、議会図書館では妻のヘレン・エヴァンズと息子のジル・エヴァンズ教授を招いて、エヴァンズの功績を称える会を催した。その席には議会図書館で共に仕事をした人々のほかにベルギー国立図書館前館長、国立農業図書館前館長らが出席している。議会図書館は1982年に、A Memorial Tribute to The Tenth Librarian of Congressという30頁の冊子を纏めた。その冒頭で、館長のダニエル・J・ブアスタンはエヴァンズの人柄を次のように称えている。

“.....there would be two principal aspects.....: First, the life and personality of Luther H. Evans, with all of his gusto and vitality, and, second, the fulfillment of some of his visions and hopes for international culture, including the flow of books in the world of scholarship and of commerce.” エヴァンズの心底から湧き出る喜びとヴァイタリティとが印象的だったこと、また、

I found him full of imagination and hope. If there was one characteristic which impress me most, it was the boundlessness of his hope. He did not allow himself to be confined by the probable but always reached out to what he thought was necessary and desirable. If others did not share his vision, he would first try to persuade them to share it and then work with ingenuity and courage to see that his vision was fulfilled.「夢と希望に溢れて、エヴァンズは物事を、単に成り行き任せにせず、必要なこと、望まれることを目標に据えて仕事をした。彼の目指す夢を理解出来ないものがいれば、その人々を説得し引き込み、創意と工夫、と勇気をもってその夢を実現させるために仕事をした。」

このブアスタンのことばは、エヴァンズの仕事全体をよく言い表している。

チャールズ・ドジスの手稿本が英国国民への贈り物としてアメリカの民間人から匿名で、大英博物館へ寄贈されたことは、数多いルーサー・ハリス・エヴァンズの夢、実現のひとつであったのだ。

注1) ドジスは、9月13日と11月26日の日付けで、次のように書いている。

「9月13日(火)クロフト。『アリス』の手稿本の絵を描き入れるのが終わった。[11月26日(土)手稿本をやっとアリスへ送った。]」

注2) このニューヨーク・タイムズの記事はそれまで集まった寄付金が一口千ドルだった、と書いている。

注3) Sir Edgar John Forsdykeは1883年生れ。彼は古典語学者として、また古代ギリシャの美術史家として著名であった。大英博物館が所蔵するギリシャとエトルリアの壺の分類目録を編纂した。ホーマー

以前のギリシャに関する著書やミノア美術に関する著述がある。

注4) Geoffrey Francis Fisher (1887-1972) のちのランベス男爵。古典語の試験で優等第一級を取り、オクスフォード大学で神学を修めた。レプトン・スクールの校長をしていたが、1932年にチェスターの司教、39年にはロンドンの司教になる。戦時中のロンドンにおいて聖職者たちの指導者であった。1945年にカンタベリー大司教に就任、1953年には、エリザベス二世の戴冠式を司式している。

Acknowledgement:

The writer is very grateful to Mr. August A. Imholtz, former president of the Lewis Carroll Society of North America, for supplying the essential materials for this paper.

The Return of Alice's Adventures Under Ground, Luther H. Evans, Columbia Library Columns, November 15, 1965.

Luther Harris Evans, A Memorial Tribute to The Tenth Librarian of Congress, *Obituary of Congress*, Washington, 1982.

Addresses delivered at a memorial ceremony for Luther H. Evans, formerly Director - General of the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, Unesco House 11 May, 1982.

The New York Times, p.27, March 14, 1946.

The New York Times, p.44, March 31, 1946.

The New York Times, p.22, April 4, 1946.

New York Herald Tribune, p.24, April 4, 1946.

The Philadelphia Inquirer, Thursday Morning, April 4, 1946.

New York World-Telegram, p.2, April 4, 1946.

The Times, p.4, 4 April, 1946.

The New York Times, p.61, November 7, 1948.

The Times, p.4, 13 November, 1948.

The New York Times, p.6, November 14, 1948.

The New York Times, p.26, November 17, 1948.

The Times, p.5, p.7, p.10, & p.15, 15 November, 1948.

The Eldridge R. Johnson Collection Part I, No.757.

Parke-Bernet Galleries Inc. New York, 1946.

Diaries of Lewis Carroll, vol.2, ed. by Roger Lancelyn Green,
Greenwood Reprinting 1971.